品性論(6)

――廣池千九郎の品性論①――

諏訪内　敬　司

目　次

一　はじめに
二　品性
三　品性完成
四　最高道徳的品性

一　はじめに

日本において明治時代から大正時代にかけて、フランシス・ウエーランドやサミュエル・スマイルズの翻訳書の出版とヘルバルト教育学の紹介によって、「品性」という用語が広まり、品性を陶冶するという道徳教育の考え方が広がった。[1] こうした動きを受けて、「品性」を自己の道徳論体系のなかに積極的に取り入れたのが、昭和三年（一九二八）に『最初の試みとしての道徳科学の論文』（以下、『道徳科学の論文』と略す）を著した廣池千九郎（一八六六―一九三八）である。同書は品性を自分の学説のなかに位置付けて論じた日本で唯一の著書であると

いっても過言ではない。そこで、同書を中心として廣池において展開されている「品性」の考え方を、その表現、言葉遣い等の角度からまとめておこう。

二　品性

(一)　品性の定義

廣池は同書執筆の準備を大正中期から始めており、その当時は既に「品性」という用語は日本で定着しているので今更説明する必要性を感じなかったのか、品性についての明確な定義はしていない。多少定義らしき説明を探すと、「人間の品性は、各人の先天的及び後天的より成るところのその人の徳と力との合わせしものにて、極めて複雑微妙のもの」(『新版　道徳科学の論文』第⑧巻、広池学園出版部、昭和六〇年、一二五頁。以下、巻数と頁数のみ表記する)と、徳と力の合成物を品性としている。また、「道徳もしくは信仰の伝達は、かくのごとき複雑微妙なる人間の品性を通じて……移植されるものであります」「人間の品性は生きたる人間の精神の表現であります」(⑧一二五)とも述べる。つまり、「品性」を人間の考え方、感じ方、判断等、精神活動が外に現れたものとみているのである。「神の品性すなわち道徳上の地位」(⑦二五九)という表現には、行為主体が道徳を実行した結果、道徳的評価、価値が相応して位置付けられる、との考えが伺える。

(二)　品性の内容、構成物

品性の内容、構成物は、それぞれ部分的に表現されている。例えば、「人間ひとたび伝統尊重の観念が出来るときには、たちまちにしてその人の品性は慈悲・温和・服従・犠牲・正義及び公平等あらゆる美徳を具備するに至る」(⑦三八一)と、その特徴を述べる。また、「品性において温和・質実・篤実且つ真面目」(⑦三四一)な人物と述べる例にあるように、やはり、品性が優れていれば美徳を兼ね備えるとみている。さらに、品性は学力と併記されたり(④六七)、「一般の政治家・教育家・貴族・富豪・資本家及び地主の方々が、その知識・品性・努力及び物質力の四者をもって直接に速やかに一般の民衆を善導されんことを願う」(⑦三〇一)と、「品性」は知識・努力・物質力等と羅列併記されている。この他、「知識・品性及びその他のあらゆる境遇」(①一四八)などという表現をみる限りでは、品性は道徳とほぼ同じであると考えているとみることができよう。

また、「事業上の困難に対する自然の法則を理解してこれに処する品性」(⑧四〇五)、「自然の法則及び人為の法則に一致する尊い品性」(⑧二二)とあるように、良質の品性は、大自然の法則や人間社会における決まり、一種の法則に従って形成され、またそうした品性の持ち主は、これらの法則に従う傾向がある、とみている。つまり、廣池は、法則に従うことが道徳的であると考えていると言える。

次に廣池は、釈迦、孔子、ソクラテス、イエス・キリストといった聖人[2]について、聖人とは「『意なく必なく固なく我なし』という品性を具えた御方」(⑦一七三)、「『論語』に孔子の品性を記して、孔子は四つを絶つとして、『意なく必なく固なく我なし』とある」(⑦一九一―二)と、聖人は自分の考え・とらわれ・自我等を超越しており、それを聖人の品性の特徴としている。そして、「古代の聖人は人間の品性を造ることを教えて人間の欲望に基づくところの物質的形式を斥けた。……ただその各自の品性に伴うところの物質的形式に対してはこれを許した」(⑧三六)と、聖人の品性を根本に置いた道徳観や民衆への指導の特徴を指摘している。

(三) 品性を定める標準

廣池は、聖人を聖人たらしめる慈悲心という精神作用の「有ると無きと、浅きと深きとが、その個人の品性を定むる標準となる」(⑦八六)と、品性評価の基準を慈悲心の有無・深浅に置いている。つまり、人間の道徳的特性(徳目)のなかで最も大切な慈悲がその人間の品性の程度を決める標準とみている。ここに、諸徳目のなかで慈悲を最優先するという、廣池の基本的道徳観が現れているとみることができる。

(四) 品性の重要性／強調

品性が重要であることを強調する例がいくつか挙げられている。例えば、『論語』〈顔淵第十二〉の季康子が政(まつりごと)を孔子に尋ねる部分へのコメントとして、「政治・教育の原理は上におるものの品性のいかんにあることを明からにす」(⑧一六九)と、社会の指導層の品性が重要であると指摘している。また、事業着手にはまず品性を造ることより始めるべきである(⑦一七八)と、知識や技術力や資金よりも、品性を高めることが事業の出発点であるとする。その理由は、人間の道徳性が信用を生む元であり、また知識や技術力や資金を生かすのは品性であるから、というのである。さらに、日本の武士道について、武士は単に勇気と武技を尊ぶのではなく、主としてその品性を重んじる(⑥一三〇)と、武士道の精神の中心は品性であるとみている。[3] このように廣池は、品性を非常に強調している。

(五) 品性の効果／幸福との関係

品性を高めよといくら強調しても、品性を高めた効果が明確でなくては、それに向かって努力しようとする人

はいなく、それを強調した道徳教育を進めようとしても有効性に欠けると考える廣池は、道徳の理論的研究もさることながら、道徳実践に強い関心を抱いており、いかに道徳を実践するかを研究の中心に置いている。[4]

そこで廣池は、品性が向上した場合の効果が明らかになれば道徳実践を推奨できるとして、以下のような効果をいくつも挙げている。

例えば、一般的に、好結果は「高き品性に原因する」(⑦一七八)としたり、道徳心をもつ高き品性の人を相手にすることは利益の多いことである(⑨二三七)と、品性の高い人と関係することは、利益に結び付くとしている。具体的な例として、品性を造っていれば道徳的な仕入元と結びつきができ、道徳心のある従業員を得ることができる(⑦一七八)と、人間の具体的生活としての経済活動における効果に触れている。また、仮に一時的に全財産を喪失したり社会的地位を失っても、体が健康で高い品性をもっていれば再び社会に出られる(⑨三二三―四)と、万が一深刻な事態に陥っても、品性が高ければ復活できると主張する。

次に、最高道徳[5]の実行者の「品性は社会の人心に貫徹して、ついに偉大なる光明を放つに至る」(⑨三八三)と抽象的な表現ながら、高い品性の持ち主は社会のなかで目立つと述べている。従って、品性が高まれば、社会に知られる(すなわち、有名になること)などの要求は達成され(⑦一七六)、その後、自然に権力、地位、金力、財産、団体の勢力拡張等の希望を達成することができる(⑥一八七―八)とする。また、開発や救済という精神と行為行動が品性を高め、それによって徳[6]を積んだり増殖することとなり(⑦九〇、九二)、それによって運命が改善する(⑦一七七)。あるいは、最高道徳的な精神を造れば、その精神作用は疾病寿命に効果があり、かつ自己の品性を改造して、自分自身だけではなく子孫の運命に効力を及ぼし(⑨二八八)、何事にも自己に反省して感謝生活を続けることによって不完全な品性は高まり、運命が改善し万世不朽の幸運を開く(⑧二四四)と、品性の

向上を運命の改善にまで結び付けている。さらに、品性が高まれば（道徳的な）権利ができ、信用は重くなり、社会的な地位が向上して、自由と幸福を得る（⑨一〇七）、品性の大成に努力すれば争いは消え、幸福は地位や仕事を得るよりも大きくなる（⑨三五七）等と、最終的には幸福にまで結び付けている。この点では、アリストテレスのいわゆる徳福一致の倫理思想と共通しているとみることができよう。

この他、普通の人間も品性の向上によって聖人に進み得る（⑦二五九）と述べて品性研鑽を奨励したり、品性が高まってはじめて身が修まり、一家の調和を成し遂げ、社会的に他人を統治するに至る（⑧九二）と、いわゆる修身斉家治国平天下（『大学』経一章）と結び付けている例もある。廣池には、自ら道徳を実行して自己の品性を向上させ、その高まった品性が他人を啓発し、この世界に真の幸福を現出させる（⑦二四一）と、個人的幸福を越えて、全体の幸福にまで言及する特徴がある。さらに廣池は、すべての人間が最高品性を完成し、安心・平和・幸福な生活をすることを希望しているという諸伝統の意思を体得して、各自立派な品性を造る。こうして出来たその品性を他人の精神に移植して開発し救済された人に伝統報恩させる。そして、その人と次々に開発された人々と共に世界の完成を図る（⑨三〇一―二）と、世界の完成、あるいは世界平和という人類の究極的理想まで描いている。

逆に、品性がないと永続的な効果がない例として、治病や開運等に関する妖術や降神術等の行為は品性改善に益さないので、仮に一時的に効果があっても、国家的社会的価値をもたない（⑧三九〇―一）と否定している。

(六) 品性を人間判断の拠り所とする

上記のような効果をもつとされる品性は、物の見方の根本にも利用される。日常生活で人間を判断しなければ

ならない局面に遭遇したとき、例えば、金品を貸借するか否かは相手の品性によって決める（⑦三〇）とする。つまり、道徳的な相手に借りたり貸したりしないと、トラブルが生じる可能性があると考えるからである。これには、理論的というよりは、人間の体験から得られた教訓も生かされているのであろう。

(七) 品性の質の表現

次に廣池は、品性の質について色々と述べている。それらを幾つかのグループに分けてみると、以下のようになろう。

1　高下、高低

まず、「伝統もしくは準伝統の上位に立つものは比較的品性の高きはずであります」（⑨二一九）、道徳心をもつ高い品性の人を相手にすることは利益の多いことである（⑨二三七）と、品性の高い人について述べる。このほかにも、個人として品性の高き人、高からざる人（⑧八六）、「高き品性」（②一八八、⑤三三五、⑧四二四、⑨二二四）等の表現は多くみられる。その品性の高い人としては、聖人の精神、その高き品性が本体（神）の存在を証明（⑦二三四）、合衆国の創業時代の国家の幹部の多くは高き品性の持ち主であった（⑥四一四）、等の例を出している。また、易の占いは、「占者の品性の高下」によってその断定は異なる（⑧三九二）と、易者の道徳性が高いと正しい判定が下されるとみる。さらに、「高き品性を有せざるもの」がみだりに政治的に大団体の統一平和に参加すると、利己的になる（⑨一〇九）、好結果を得ると「高き品性に原因する」（⑦一七八）と、高い品性の意義を強調している。

2　その他良い品性の表現

「品性が高い」という表現の他に、国家の栄典を尊ぶごとき人間の「高尚なる品性」（⑧五五）、「相当の品性」を有する人（⑨三四八）、「偉大なる品性」（⑦一九三）、純粋、確実、永久不変、信頼すべき品性（⑨一五九）、「真・善・美の品性」（⑧一一九）、人類を指導するに足る品性をもつ学者・政治家（⑨二一〇）、「品性の善きもの」（⑦一七九）、高き品性「すなわち神の心に一致する品性」（⑨二九九）といった表現を用いている。また、最高道徳を理解、体得して後に沈着、秩序維持、忠実、親切等の美徳が生じれば、品性は純粋、確実、永久不変、信頼すべきものとなる（⑨一五八―九）、と高い品性の特徴を多角的に論じている。

その他に、行為の動機・目的、精神作用、道徳実行の形式的方法を自然と人為の法則に適応させれば、精神作用と行為の全部が聖人の実現した純粋正統の学問・思想・道徳及び信仰に一致する、と主張する。その結果、品性は高尚、美麗になり、その行為の結果も、ある点までは必ず良好になる（⑨三二―三）と、自然及び人間社会にある法則に従って生きること、を廣池は奨励する。

3　低いとする表現

「品性が低い」という表現としては、「この階級の人々（引用者注：準伝統）はその品性は低く、その徳極めて少ない人もあります」（⑥六七）、「今人の弊は…自己の品性甚だ低き」（⑧四二五）、「その人物の品性低くして」（⑦四二二）、事業や職務に熱中して健康を害したことは「品性の低いことを示す一つの証拠」（⑨三二四）、成功を急いで投機心をもつ人は品性が低く見える（⑨一九九）、等がある。これらにみられるように、品性が低いというのは、道徳の程度が低いことであると見て取ることができよう。

4　その他の低い表現

これには、未だ開発救済に適さない品性（⑨二七）、「不完全な品性」（⑧二四四）、「物欲は人間の品性の最も下

劣なることを現す」（⑨三三一）、「品性野卑の人」（⑨三九八）、「真の品性に至っては甚だ卑しいもの多く」（⑧一一九）、品性の高からざる人（⑧八六）、等がある。なお廣池は、「品性の乏しき民間人」が陪審員になって情実に流れることある（④二一一）と、陪審員制度に否定的である。[7]

(八)　**高き品性の強調**

理論以上に実践に関心をもつ廣池は、身を処することや事業経営にもまず高き品性の形成を主とし、内容を充実しなければ真の成功、幸福は招来できない（⑦一八〇）、「処世法の根本原理は、まず自己の高き品性を造ることにある」（⑦一八〇）、精神を道徳的に向上させて高き品性を保つ努力をしないと悪い仲間に近付く／同類となる（⑨四〇七）等、事を始めるに当たり、まず自分の品性を高めることが事の成否の鍵である、という基本姿勢を強調している。

(九)　**品性を高める方法**

品性の重要性の強調や品性の効果の次に問題となるのは、いかに品性を高めたらいいかである。それが品性教育としての道徳教育の方法論となる。その場合、高める方法について、いくつかの類似した表現がみられるので、表現ごとに方法論を分類してみよう。

―　品性を造る方法

まず、「神の心を体得して自己の品性を造る」（⑤八）という方法論に、廣池の品性論の特色があると指摘することができよう。廣池は、神には正義と慈悲の原理が働いているという神（自然）観のもとに、神自然に従った

生き方をすることが最も道徳的だという独特の考え方をもっている。そこで、神自然が示す道を身に付けることが品性を造ることになる、と考えるのである。

また、廣池は国家や家庭の中心者、あるいは人類を高度な道徳的次元にまで導くとする聖人等を「伝統」と呼び、その伝統に対してその恩に報いるという伝統報恩の新旧原理の差を理解することが真の品性を造る根本的基礎である（⑦二七四）とする。伝統報恩実行の一例として、無駄事に労力を費やさずに、金銭を人心の開発救済の土台になるようにとの心をもって使うと救済され、さらに無我になって、この精神が品性となって人格を造る（⑧二二四）、としている。

2　品性を形成する方法

まず、正統の学問及び知識を獲得することが品性形成の基礎（⑨九〇）であると、知識の必要性を主張する。そして、神の心に一致する愛他的苦労（動機目的方法共に人心開発救済のために精神的物質的犠牲を払うこと）をすると真の品性形成に役立つ（⑧三一四）、「贖罪のために犠牲を払うという観念から出ずるところの犠牲の行為」が品性形成の原動力である（⑦一二〇）と、苦労、犠牲、下積み等日の当たらない地道な行為を積極的に評価しようとしている。また、品性は、最高道徳の一原理である「自我を没却」して（その方法は、伝統に服従し人心開発救済をすることによる）自然に形成される（⑦一九三）、とする。

3　品性を向上する方法

類似した表現として、品性を「向上する」というのがある。その場合、精神の向上によって品性の向上が生じ（⑦二五九）、自ら道徳を実行して自己の品性を向上させ（⑦二四一）、父母たる人は教育、道徳上及び宗教上の教養を勉めることにより品性向上をはかるべく（①一六九）、また、上のものは下のものや友人の諫言に聴従して

品性の向上をはかる（⑦二二一）、といったことが示されている。ところが逆に、徳を積むことのみを目的にして最高道徳を実行してもそれは功利的になるので、結局品性は向上できない（⑦一二〇―一）と言う。つまり、結果を期待して道徳を実践するのではなく、純粋な動機からの実践でなければ、品性の向上はできないという考え方である。これは、I・カントが道徳実践について、結果を考えずに義務感という動機から行わなければならないとした考えと共通している。

この他、品性の向上は最高道徳的精神を造ることによって得られる（⑨三八八）、自己を開発救済する精神的父母（筆者注：精神伝統のこと）の事業を援助したり、精神的父母に報恩して（⑦三五〇）、上に立つ人は、一面では下の人を最高道徳的に開発して品性を向上させる（⑦四二四）、というように、結局、最高道徳を実践することが、品性向上の方法論ということになる。

4　品性を高める方法

第一に、自分の行動は神・自然の力によるという精神作用になると精神は平和、温和になり（⑨二九二）、また、自我を没却して神の心・自然の法則に従えば、品性は高まる（⑨一〇七）と、神・自然の力／法則に従うという考え方を示している。

次に、いかなる事をも自己に反省して感謝する精神作用と行動の累積により、不完全な品性も漸次高まる（⑧二四四）、相手に報恩報酬を求めないという姿勢でいることが精神を平和にし、また品性を高尚ならしめられる（⑦九〇）、名誉や利益になる地位や仕事は他人に譲り、実力を磨き、徳を積んで品性の大成に努力する（⑨三五七）と、基本的な姿勢を正す必要性を強調する。

また、最高道徳、あるいはモラロジーの原理を理解し、行為の動機・目的、精神作用、道徳実行の形式的方法

を自然と人為の法則に適応させると、精神作用と行為の全部が純粋正統の学問・思想・道徳・信仰に一致して、品性が高尚、美麗になる。そして、その行為の結果、ある点までは良好になる(⑨三一―三)。また、最高道徳を理解し体得して後に沈着、秩序維持、忠実、親切等の美徳が生じれば、品性は純粋、確実、永久不変、信頼すべきものとなる(⑨一五八―九)、という。

さらに、品性を高める方法を最高道徳の諸原理に結び付けて説くものが多い。例えば、徳の不足を反省し、慈悲心をもって他に対すると、品性はますます高くなる(⑦一三〇―一)、人心を開発救済したいという精神をもって行動する、人心の開発救済に役立つことに努力を惜しまないという精神・行為が品性を高め、徳を増殖させる(⑦九〇、九二)、とする。また、伝統に対し、あるいは、人心開発救済の事業に対してあらゆる至誠を尽くして進めば、品性はしだいに高まる(⑧二一八)、精神の開発救済の親(精神伝統のこと)に密接に接触して指導を受けて品性が高まることに勉める(⑦三四七)、知的には自己の精神作用と行為の結果が幸福をもたらすという因果律を認め、道徳的には自分を忘れて真の慈悲心を起こして人心の開発救済に努力して品性を高める(⑦二一三)、等の方法を示している。

以上1～4のように、「品性を造る」、「形成する」、「向上する」、「高める」、という表現上の違いはあるが、本質的には同じことを述べていると思われる。しかし、これらの表現は意識的に使い分けられているかどうかは定かではない。

(十) 品性の改造

廣池は品性の「形成」や「向上」等の他に、品性の「改造／再造」という表現も用いている。すなわち、神の

心(神の知識と道徳)をもって人間の精神を道徳的に改造した結果、伝統尊重という新しい道徳観念がその精神に発生してその品性が根本的に改造された(⑦三八四)ことになるとか、最高道徳的精神を造れば、その精神作用は疾病にも寿命にも効力があり、かつ自己の品性を改造して、自分・子孫の運命に効力を及ぼし得る(⑨三八八)という。また、唯心的安心立命の説明として、大困難に遭遇したときは、物質の世界を離れて神に信頼し、自己の至誠と慈悲の力のみによって人心の開発救済に従事して品性を再造し、それによって新生涯を開こうとする熱烈な信仰(⑧四二七)が必要であるとする。

この他、日本以外の国でも、国の指導者層が最高道徳を実行して国民の父母たる心をもち、その品性の根本を改めて国民を開発救済すれば国民から慕われ、国の親と仰がれる(⑦三四二―三)と、やはり品性を改めることを勧めている。ここでは、普通道徳レベルではなく、最高道徳的レベルの品性になることを改造と言っていると思われる。品性を高める、向上させる、完成する、等の表現よりも、「根本的改造」と言った方が強烈な表現として受け止められやすいと思われる。

(十一) 個人の品性の問題

廣池はK・マルクスについて、財閥や資本家個人の品性をその考慮に入れて憤慨した(④一四〇)が、経済・産業上の欠陥と資本家個人の品性の問題とを混同し、資本家個人の品性の問題の淵源に遡って社会を改善することに気付かなかった(④一三八)と、特定の具体的な人間の品性をどう評価し、その結果がどうなったかを示している。

(三) 道徳実行と品性の関係

最高道徳では、他人を開発救済するのも自分の品性を造るためと(⑧一九〇)、開発救済の目的は品性を造ることとしている。また、自己の品性を造ることが最高道徳実行の最初かつ終極の目的(⑧一九七)とあり、道徳実行の目的は品性を造ることであり、逆に品性を造ることが道徳実行の手段であるという関係になっている、と指摘することができよう。

(四) その他の表現

上記以外に品性について言及したものとして、以下の表現が使われている。

・大石蔵之助の命令の精神は「伝統に対する報恩」を成し遂げれば、人間として、かつ武士として自己の品性を全うし得ると考えていたと思われる(⑦二九六)

・品性が善くなる(⑨二九三)

・品性の教養(⑧一四三)

・品性陶冶に関する教育(⑧四一九)

・品性陶冶に重きを置く大学(⑨一四六)

三 品性完成

(一) 「品性完成の科学」の表明

廣池は自分の道徳学説を「品性完成の科学」(⑦三、一三)であると宣言している。その学問創設の意図は、品

性を完成すれば幸福を得られることを科学的に明らかにしようとしたものである。[8]

(二) 品性完成の意味

まず、品性が完成しているとは、第一に過去の贖罪を含み、第二に現在の精神作用の純潔至誠にして神聖人の意思を実現していることを意味している(⑨二八一)と、考え方、感じ方等、人間の精神活動が道徳的に純粋であること、しかも、廣池のいう聖人の意思を具現していることが、品性が完成している状態であるとする。

また、個人としての品性が完成することは、同時に、国家の保存、統一、完成に尽力することを意味する(⑧八七)、すなわち、国家の有徳者とその子孫を尊重して伝統の原理を維持し、これを他人の精神に移植すること、と説明し(つまり、品性の完成した人は国家伝統を尊重してその考えを他人にも伝えることができるという説明である)、個人だけではなく、国家にも配慮することを含めている。しかし、これらは品性完成そのものの意味を説明しているのではない。

次に、「高き品性の形成」を「高き品性を造る」とも「品性を完成し」とも言い換えているが(⑦一八〇)、これらは同じものとみていいのではないか。また、従来の(普通)道徳や信仰で「品性を造る方法」を「品性完成の方法」と言い換えている(⑧四一〇)。これらの表現は特に明確に使い分けているわけではなく、言い換えであるように思われる。従って、これらは同じものとみなしていいのではないか。ただし、高い品性をどの程度造ったら完成となるのかの基準、また、完成の意味についての具体的な説明は見当たらない。

(三) 品性完成と道徳との関係

廣池は品性完成と道徳について、「道徳とは自己の品性を完成すること」(⑨三八)、「道徳とは自己の品性を完成するための行動を指す」(⑨四〇)、「道心は自己の品性を完成すること」に当たる(⑤三二五)と述べ、品性を完成することそのものが道徳、または道徳的行為であるという見方を示している。つまり、廣池にあっては、真の道徳というのは、人間個人個人の品性を完成することと同じ意味で捉えられていると思われる。

(四) 品性完成は最高道徳の目的

廣池は、人間の生き方として利己的、政策的、交際的、狂奔的、事業的に行動せず、最高道徳によって自己の品性完成にのみ心を注ぐべき(⑧四一二)であるとする。そして、最高道徳の一方の目的は自己の保存・発達であるが、他方の目的は品性の完成であるとする(③一二七)。前者よりも後者に重きを置いて、さらに展開して述べる。すなわち、過去の罪の贖いと、将来の品性完成のために犠牲を払うという精神作用によって最高道徳的努力をする(⑦一二九)、(最高道徳の一原理である)人心の開発救済の目的は自己の品性完成である(⑧二五一)、人心開発救済の終極的目的は、(他人を開発救済することによって)自分の品性を完成することである(⑧一九七)とする。この点については、他人を開発救済するという行為が自分の品性完成の手段とみなされるので功利的ではないかという疑問が生じる。しかし廣池は、この功利性の疑問を、最高道徳実行の究極の目的は自己の品性を完成し、その功徳を人類社会に樹立すること(⑧一五二)と、個人レベルに終わることなく、さらに社会にその影響を広げて行くことで克服しようとしている。

(五) 品性完成の方法

まず、道徳心を進める(⑧三一九)とか、いかなる事があっても自己反省することが自己の品性完成(⑧二四三)への第一歩と考える。

次に、最高道徳の個々の原理をそれぞれ実行することが品性完成の方法であるとする。すなわち、①自我を没却して神自然の慈悲心に同化し、②神の延長である伝統に絶対服従し、③物質生活の余力の多くを人心開発救済に使用し(⑧四一二)、開発救済の目的として物質的な手段を取るのは品性完成のため(⑧二五四—五)、④自我没却の精神をもって、国家の秩序統一、国民の幸福と世界平和の実現を計ろうとする慈悲の精神を完成し(⑧八四)、⑤人心を開発して自分の品性を完成する(⑨三〇一)、⑥個人だけではなく、その集合体としての国家、社会をも開発救済する(⑧二五一)、等とする。そして、品性を完成してその功徳を人類社会に樹立する究極の方法は人心開発(⑧一五二)であると、最高道徳の五大原理のうち、特に開発救済の原理を重視する。

こうして、「最高道徳は人間の品性完成の本質的手段として存在する」(⑦一三)と位置付ける。つまり、品性完成のための手段方法として最高道徳があるという位置付けである。要するに、最高道徳の理解と実行(⑦八)が品性完成の方法とされるのである。

(六) 普通道徳の品性完成法の欠点

廣池は、伝統的に行われて来た普通道徳の品性完成法には、例えば、形式的な礼儀作法によって肉体を拘束し、偏狭な教理で精神を拘束し、あるいは慣習に反するような苦行を課したり、隠遁したり、医薬を禁止したり、過大な寄付を求める(⑧四一〇)などの欠点があるとする。また、たとえ行為者に慈悲の心が混ざっていても、自

利的に自分の精神及び態度を高尚にし、美化しようとするにとどまる（⑦七）と、批判する。さらに、それは自然の生活法に反する（⑧四一〇）ので、健康法、長命法、開運法、子孫繁栄法[9]等と一致せず、動機目的方法は利己的である（⑦六）、品性完成の方法が確定していない（①一一五、一一六）、普通道徳の品性完成の方法と幸福享受の方法は矛盾している（⑧四〇九）、などを挙げる。要するに、不完全である（⑧四〇九）ということである。

(七) 品性完成の効果と幸福実現との関係

まず、品性が一旦完成し補助者を道徳的に同化させて事業の基礎を確立すれば、その他のことは座して成る（⑦一八〇）と、一般的な効果を述べる。そして、最高道徳の品性完成法は健康法、長命法、開運法、一家和合及び子孫繁栄の法と一致する（⑧四一〇）としており、これらのものが得られるとする。別の言葉を用いれば、品性完成の結果は神より自然の爵位を賦与される（⑦八）、ということである。

次に廣池は、道徳を実践して品性が完成すれば幸福は自然に得られると、品性完成の効果を幸福に結び付ける。すなわち、品性完成を主として、欲望に熱狂することをやめれば、確実な安心を得、具体的に幸福を享受する（⑧三九三）、「幸福実現は品性を完成することにある」（①七六）、あるいは、伝統の立場にいる人との間に摩擦や問題が起きたら、その責任を自己に反省し、至誠をもって伝統を尊重すれば事業は偉大となり、品性はますます完成されて幸福は求めずして到来（⑦二七一）する、と主張する。[10]

廣池の考えでは、聖人の事蹟は、品性の完成の結果は積極的に幸運を得ることを開示（⑧二七七）したとする。そして、品性完成を求めないと、一時の名利を得ても永久の安心幸福を失う（⑧四一五）、品性完成を思わざる

は、永遠の幸福を希わざることに帰する（⑦三五七）と、幸福の永久性保持を強調する。このように、品性完成は永久に幸福であることを保障しようとする点に廣池説の特徴がある。ただ、二(五)で示したように、「品性の効果と幸福」と、「品性完成と幸福」は同じことを言っているように筆者には思われる。

四　最高道徳的品性

(一) 最高道徳的品性の内容、例

最高道徳的品性の中身については、「真の慈悲心の完成はすなわち真の最高道徳的品性の完成である」（⑦九八）、「天照大神は天の岩戸籠りによって慈悲寛大・自己反省の最高道徳的品性を完成した」（⑥三一一）、と言うだけで、『論文』には他に最高道徳的品性の定義や意味的説明は見当たらないように思われる。

(二) 最高道徳的品性の完成、形成の方法

最高道徳的品性の造り方について、漠然とした説明としては、最高道徳的精神を磨いて形成する（⑨四〇八）、生存・発達・安心・幸福享受の原理を体得して完成する（⑦二八〇）、とある。この他に、正義実現の目的の下に、慈悲の純精神によって犠牲的行動を執ることによって造る（⑦一一八）と、最高道徳の実践によって得られるとしている。さらには、それを造る模範は聖人の教説と聖徳（⑦一一八）であるとする。つまり、最高道徳によって完成されるということである。

次に、最高道徳的品性完成における動機、目的、方法は、①自然の法則と人間の運命の法則とを自覚して、物理学的因果律と人間の行為に関する因果律を信じる、②宇宙自然の法則（＝神の心たる慈悲心）をもって道徳実行

の標準とする、③宇宙自然の法則を遵守する結果として、権利の主張よりは義務の実行に努力する、④自然の法則を遵守する結果、聖人の教説を体得して神の存在を信じる、⑤以上の原理に基づいて神から伝わる伝統を尊重して絶対服従する、⑥以上の原理を実行し、その精神を他人に移植して開発救済する（⑦七）と、総合的にまとめている。

㈢ 最高道徳的品性と普通道徳的品性との関係

両者の関係については、「普通道徳的かもしくは最高道徳的品性を形造り」（⑨二三八）と言い換え、また、普通道徳における品性の完成と最高道徳的品性完成すなわち最高道徳における品性の完成（⑦七）とあるので、別ものであるみることができる。ただし、後者の表現からわかるように、「最高道徳的品性」と「最高道徳における品性」とは同じものを表している。また、普通道徳的品性、普通道徳における品性とはっきり断っていない場合には、最高道徳的品性を指していることが多いように見受けられる。

㈣ 最高道徳的品性の効果と幸福との関係

普通道徳的か最高道徳的品性を形成して道徳的権威を保有すれば、道徳心ある人を相手にすることができる（⑨二三八）、それを形成すれば善人賢人に接近できる（⑨四〇八）、あるいは、最高道徳的品性を完成した結果、自然に家業、職務、財産、地位等を増大することを人間生活の本質とする（⑧一九〇）と、幸福の物質的条件が増大することを強調している。

また、最高道徳的品性を造れば、どの国、土地に住んでも危険や不安がなく、安心しつつ幸福を得る（⑦四一

三）、とされる。基本的には、「品性完成の効果」と同じことを言っていると思われるのであるが、『論文』においては「品性完成」や「品性形成」ということの効果と比べると、強調度が低いように感じられるし、効果を強調する頻度も減っている。このことから、最高道徳的品性は品性よりもむしろ低いのかとの疑問が沸いてくるが、品性完成というのは基本的に最高道徳的品性完成のことを指していることが多い。既に、品性完成という表現で効果や幸福と結び付けているので、最高道徳的品性の効果を述べる必要性がそれほどなかったということなのではないだろうか。

〈註〉

(1) 拙稿「品性論㈠――近代日本での発生と展開――」『モラロジー研究』三〇号、一九九〇年、参照。

(2) 聖人とは一般に、知徳ともに優れた理想的人間を意味するが、日本では儒教の影響から江戸時代までは、聖人といえば堯、舜、周公、孔子等といった中国古代の聖人を指していた。明治時代に欧米思想が日本に入ってきて、ソクラテス、イエス・キリスト、釈迦、さらにカント等を聖人に加える傾向が生じた。例えば、哲学館（後の東洋大学）を創設した哲学者の井上円了は、釈迦、孔子、ソクラテス、カントを四大聖人とみなして東京に設置した哲学堂に祭っていた。他方、キリスト教では、特にカソリック教会が独特の聖人観をもっている。狭義には、信仰と徳に優れてその功徳が信徒の救いに有効であると認めて、教皇が聖人として宣言し、正式に崇敬された人を聖人と呼ぶ。

(3) 同様の指摘は、新渡戸稲造『武士道』第十章「武士の教育及び訓練」にもある。「武士の教育に於いて守るべき第一の点は品性を作るにあり、思慮、知識、弁論等知的才能は重んぜられていなかった」矢内原忠雄訳『武士道』岩波文庫、昭和十三年。

(4) この点では、カントが道徳論を研究するについて、実践に関心をもっていたのと同じであることを指摘できる。

(5) 最高道徳とは、廣池が聖人とみなす（その資格は⑤

六―九に述べられている）天照大神、釈迦、孔子、ソクラテス、イエス・キリストの思想や行為・事跡に一貫しているとする内容を、廣池の視点からまとめて命名したものである。これらの内容は社会一般に慣習的に行われてきた道徳とは質が一段と高いとして、慣習的道徳を普通道徳と呼ぶのに対して、最高道徳と名付けている。その主な内容は、自我没却の原理、義務先行の原理、伝統尊重の原理、慈悲実現の原理、人心開発救済の原理の五大原理としてまとめられている。廣池はこの道徳を人間社会における理想のものであるとして、その普及を図ろうとした。一九七〇年代のアメリカで道徳性の発達段階説を唱えて学校での道徳教育改善に乗り出したコールバーグは、彼が道徳性の最高段階とみる六段階の内容と廣池の理論とには共通性があるとしている。ただし、コールバーグは第六段階にいる人物として、シュバイツアー、ガンジー、マザー・テレサ、マルチン・ルーサー・キングらを挙げ（L。コールバーグ『道徳性の発達と道徳教育』岩佐信道訳、広池学園出版部、一九八七年、三、三七―五七頁参照）、廣池とコールバーグとでは、道徳的に最も高い段階にいる人物の評価は異なっている。これは、一つには、廣池が古代の人物を中心に取り上げたのに対して、コールバーグは主に現代人を考察対象にしたことと関係があるのかもしれない。また、コールバーグの挙げる人物が、廣池の基準に合致するかどうかは意見の分かれる所であろう。

「最高道徳」という言い方には、普通の道徳と対比して違いを際立たせたいという廣池の思いがあったように見える。廣池は後に、「純粋道徳」という名称にしても良かったと、述べている。カントも最高善の実現ということを主張しており、一般的に、特別のものであることを強調しようとする場合に、「最高」と表現する傾向があると言える。ただし、カントの場合には、無上の善いものとしての最上善が幸福に一致して初めて最高善になると考えており、聖人の思想が最高と述べているわけではない。

(6) 廣池の言う徳とは、道徳を実行した結果身に付いた無形の力で、さらに道徳を実行させようとしたり、言語や行動に現れて、他人に影響や感化を与えるだけではなく、健康、経済的安定、幸福といったものをもたらす、というものである。さらに、徳は個人レベルだけではなく、遺伝及び生後の環境によって家庭内に伝わったり、社会や国家単位でも伝わるとする。そして、個人の作り上げて行く徳だけではなく、個人・社

会・国家に伝わった徳（余徳）も、個人の新しい徳の形成に効果的な影響を与えるとみる。従って、受け継いだ徳と、それを元に個人が自分の代に形成・向上した徳とを次の世代に伝へていくということによって、徳の進化が図られることになる。「道徳は現在における自分の精神作用及びそれに基づく行為の結果であって、徳は先天的素質及び後天的に得たところのすべての知識及び力などをも含み、道徳的標準に従い得る卓越せる能力を意味するものと考えられます。…この故に、徳には原因明白のものと原因不明のものとがあるのです。」（②一八八―九）。水野治太郎『改訂　心を開く』広池学園出版部、一九八三年、一八九―二二三頁、参照。

(7) 現在、日本では裁判に陪審員制度を導入しようとする議論が高まっているが、廣池は陪審員の道徳の程度によっては、かえって正常に機能しない恐れがあることを危惧している。

(8) これには、時代背景を指摘しておかなければならない。一九世紀から二〇世紀にかけては、自然科学が急速に発展し、科学は万能で、何でも解決できると信じられていた。そして、自然科学を人文・社会科学に応用することによって、これらの分野でも科学的理論が確立できると期待された。廣池もその時代の影響を受けて、道徳の分野にも科学的理論を打ち立てる必要性を強く感じていた。しかし、科学が万能ではないことは今日に至って明瞭になり、むしろ科学の不完全性が浮き彫りにされている。モラロジーは自然科学、人文科学、社会科学の分野を研究対象にしており、経験科学に基礎を置きながら規範性をも追求するという意味では総合科学と言える。岡田晃『モラロジーの科学性――開発シリーズ⑬――』広池学園事業部、一九七二年、参照。

(9) ここにも、時代の反映が見られる。すなわち、第二次世界大戦までの日本では、長寿になったり子孫が増えることが幸せと考えられていた。しかし、高齢化社会を迎えた現代の日本では、長寿は必ずしも理想ではなくなり、また、女性が子供を産む数も減少して少子化傾向にあり、子孫繁栄を幸福の条件とは認めない人がいるのも事実である。

(10) 「ますます完成する」という意味は、特定の基準を越えるのではなく、「ますます高まる」ということかどうかはっきりしない。品性は一度完成すれば二度と堕落しないのかも、不明である。常に向上を目指さないと堕落しやすいというのが人間の弱点ではあろうが。